

**前期：キリスト教思想と宗教哲学**

オリエンテーション——宗教哲学とその基本問題

1. 宗教哲学の歴史と伝統 2. 理性と啓示 3. 悪と神義論 (4. 予定と自由意志)
5. 形而上学と神
6. シュライアマハー 7. トレルチ 8. 波多野精一
9. ブーバー
10. ティリッヒ 6/19
11. リクール 6/26
12. 研究発表1 (山田、田中) 7/3
13. 研究発表2 (岡田、長原) 7/10
14. 研究発表3 (張、 ) 7/17
15. 研究発表4 (齋藤) 7/24

**〈前回〉波多野精一**

5. 波多野精一『波多野精一全集』全六巻、岩波書店、1969年。  
『時と永遠 他八篇』『宗教哲学序論・宗教哲学』岩波文庫、2012年。

**(1) 生涯**

幼年・修学時代 (1877～1899年、早稲田大学時代 (1900～1916年)  
京都帝国大学時代 (1917～1937年)、退官後から晩年期 (1938～1950年)

**(2) 波多野宗教哲学の形成過程**

11. 波多野宗教哲学自体の形成過程：40歳で京都帝国大学に教授として着任してからの20年間。
12. 波多野の宗教哲学構想を導く2つの問い：
  - 1) 近代以降の思想状況において従来の宗教哲学を乗り越える宗教哲学の哲学的基礎はどこに求められるのか。宗教「哲学」。
  - 2) 宗教自体の要求に適切に応答する宗教哲学とは何かという問い。「宗教」哲学。

**(3) 近代の知的状況と宗教哲学**

14. 「誤れる宗教哲学」→「正しき宗教哲学」
  - ・思想世界が啓蒙主義の決定的な影響下にあった近代という時代にあつて、宗教を積極的に論じること。
  - ・実証主義的学の理念にしたがった宗教学 (= 現代宗教学)：宗教心理学  
コントの実証主義、フォイエルバッハ
15. 自然主義に陥った実証主義的宗教研究：「必然的帰結として宗教の否定に導く」、「宗教の事実を曲解しその真相を歪曲する」(『宗教哲学序論・宗教哲学』岩波文庫、16頁)  
実証主義は認識論的相対主義を帰結することによって、宗教的体験が志向する体験の実在性 (志向対象の絶対的実在性・神聖性) の意味を正当に扱うことができない。
 

↓

  - ・「事実性」の問い直し。事実は意味あるいは理解と関連することによってはじめて、知の対象となる。いわゆる「生の事実」といったものは人間の経験においては存在しない。

↓

  - 経験的な事実に基づく宗教と、その反省的自己理解としての宗教哲学は、実証主義的な方法論に基づく宗教研究 (たとえば、宗教心理学) においても、その意味を失うことはない。

16. 『宗教哲学序論』で「誤れる宗教哲学」と呼ばれる合理主義的宗教哲学の立場。  
 神を直接の理論的な認識対象とする哲学、その意味で、「神の学」。  
 神の存在論証は論証ではなく人間における宗教的問いの表現である。ティリッヒ。
17. 正しき宗教哲学：神自体を理論論証の対象とする哲学ではなく、人間の事柄としての宗教、人間の生における宗教の可能性と現実性を論じる哲学。
18. 超自然主義の神論：この超自然主義と合理主義との模範的な結合としてあげられるのが、トマス・アクィナスの神学。
19. 『宗教哲学序論』の「正しき宗教哲学」とそれに基づく『宗教哲学』の体系的叙述。  
 「宗教的体験の理論的回顧その反省的自己理解」＝批判哲学＋実在論
20. カントの批判哲学にこそ宗教哲学が辿るべき「正しい道」が見出される。  
 人間の営みとしての宗教を対象とする宗教哲学構想は宗教哲学の人間学化あるいは人間学的転回（パネンベルク）  
 ・カント主義の形式的理想主義と反主知主義。
21. シュライアマハーの「高次の実在論」にしたがい、宗教的実在論に立った宗教哲学の構築を試みる。→解釈学  
 ・神ではなく宗教、つまり宗教的体験が宗教哲学の対象。  
 ・宗教的体験＝宗教哲学が前提とすべき事実。この事実を人間存在における意味との関わりにおいて解釈する。  
 ・歴史的他者の体験はそれが表現され伝承されることを通して研究者にもたらされるのであって、その事実には解釈が不可分に伴っている。歴史は出来事であるとともにその物語だから。他者の体験と研究者自身の体験との関連づけ。  
 ・波多野宗教哲学の対象とする事実が意味を内包する事実であることから、宗教的体験の「理論的回顧その反省的自己理解」という解釈学的作業が帰結する。

#### （４）波多野宗教哲学の構成・内容

23. 『宗教哲学序論』「第三章 正しき宗教哲学」（同書、84-108頁）。  
 宗教哲学体系の本論と各論：宗教本質論、類型論、人間学  
 「すでに論じた如く宗教の学的研究は事実の内面的意味を前提にせねばならぬ。この内面的意味は体験において与えられまた知られる。合理主義の宗教哲学と異なって正しき宗教哲学は宗教的体験の反省的自己理解、その理論的回顧として成立つ。体験の立場に立つものは宗教が他と混同を許さぬ固有の意味内容を有するを知る。かかる意味内容を反省に上せ、その理論的理解を原理へと推進めて行くものは本質の観照把握に到達してはじめて満足を見る。この本質の理解こそ宗教哲学である。」（同書、84頁）
25. 歴史的な個別的な現象（体験とその表現）から類型を経て本質に至る過程の中に、この本質直観は位置づけられる。波多野宗教哲学は現象学的である。
26. 宗教の本質理解の内容：高次の実在との関係・交わりこそが宗教の核心を構成するものであり、波多野は、この実在を愛の関わりにおいて人格として出会う他者、神聖性を有する絶対的他者として説明してゆく。
27. 宗教類型論：本質直観がなされるべき直観の素材（典型的事例）を与える。
28. 哲学的人間学：絶対的他者の意味を明らかにするには、人間的生のあり方を他者関係において解明する。
30. 人間学：カントやシュライアマハー。より直接的には、シェーラー、ハイデッガー、そしてブーバーの哲学的人間学が意識されている。

## 9. ブーバー

### **Buber, Martin (1878-1965) :**

ユダヤ人の宗教哲学者。著作の大部分はドイツ語。学生時代にシオニズム運動に参加。1904年頃から神秘主義運動に傾倒、13年に脱却、この間にハシディズム関係の伝記的著作を著す。1923年に『我と汝』を公刊、25年からヘブライ語聖書のドイツ語訳に着手（当初はローゼンツヴァイクと共同、訳は1961年に完了）。38年にエルサレムに移り、ヘブライ大学で社会哲学の講座を担当。62-64年に全集の刊行。イスラエルのアラブ政策には批判的な立場をとり続け、両民族の平和的共存のために努力した。（『キリスト教人名辞典』日本基督教団出版局、を参照）



〈思想家・実践家〉

- ・対話の哲学
- ・ヘブライ的人文主義とドイツ語訳聖書
- ・ハシディズム
- ・シオニズム運動
- ・宗教社会主義

### (1) 対話の哲学

#### 『我と汝・対話』(岩波文庫)

#### 第一部：

「世界は人間のとる二つの態度によって二つとなる。人間の態度は人間が語る根源語の二重性にもとづいて、二つとなる。根源語とは、単独語ではなく、対応語である。根源語の一つは、〈われ—なんじ〉の対応語である。他の根源語は、〈われ—それ〉の対応語である。」  
 「したがって人間の〈われ〉も二つとなる。」(7)

「根源語〈われ—なんじ〉は、全存在をもってのみ語る事ができる。根源語〈われ—それ〉は、けっして全存在をもって語る事ができない。」(8)

「経験される対象の世界は、根源語〈われ—それ〉に属している。根源語〈われ—なんじ〉は、関係の世界を成り立たせている。関係の世界をつくっている領域は三つある。」(11)

「自然と交わる生活」「人間と人間が交わる生活」「精神的存在と交わる生活」

「われわれは、それぞれの三つの領域において、現存しながら生成する存在者をとおして、永遠の〈なんじ〉の裳裾をかいま見」(12)

「関係は相互的である。」(14)

「経験とは〈なんじから遠ざかること〉である。」(16)

「恵みによって〈なんじ〉とわたしと出会う」、「関係は選ばれることであり、選ぶことである。能動と受動とは一つになる」、「真の生とは出会いである」、「〈なんじ〉との関係は直接的である。」(19)

「間接的な手段、媒介はすべて障害である。ただすべての手段が破れるときにのみ、出会いがおこるのである。」(20)

「真の存在性は、現在の中に生かされ、対象性は過去に生きる。」(21)

「愛は〈われとなんじ〉の〈間〉にある。」(23)

「愛は〈なんじ〉に対する〈われ〉の責任である。」(24)

「〈なんじに働きかけつつあるわれ〉、〈われに働きかけつつあるなんじ〉」(31)

「〈働きつつある〉という分詞の名詞化、概念の実体化が行われたのちに、はじめて〈わ

れ)が現われるのである。」(32)

「はじめに関係がある。関係こそ存在の範疇であり、他者を迎える備えであり、ものを捉える形体であり、魂の鋳型である。関係のアプリオリとは〈生まれながらのなんじ〉である」「関係を結ぼうとする衝動」(38)

「人間は〈なんじ〉に接して〈われ〉となる。」(39)

「世界は人間の二つの態度によって、二つとなる。」(43)

「ひとは赤裸々な現存の中に生きることは不可能である。迅速にしかも徹底的に現存を従わせるべく、あらかじめ手をうたないならば、現存はひとつを喰いつくしていまうであろう」、「だが、真理のものあらゆる厳肅さをこめて、あなたにつきのようにいおう。人間は〈それ〉なくしては生きることはできない。しかし、〈それ〉のみで生きるものは、真の人間ではない。」(47)

## 第二部：

「人間の中に告知される精神とは、〈なんじ〉にたいする人間の応答である」、「精神は一つ、神秘の中から現われ、神秘の中で語りかける〈なんじ〉に向かっての応答である。精神は言葉である」、「精神は〈われ〉のなかにあるのではなく、〈われ〉と〈なんじ〉の間にある。」(50)

「真の共同体はすべて人々が生きた中心にたいし、生き生きとした相互関係をもつこと、さらに人々の間で総合に生きた関係をもつことである。人間同士の相互関係は、生きた中心と関係を結ぶことから成り立つのであって、人間の相互関係だけで生ずることはない。」(58)

「真の公的生活と真の個人的生活は、人間の結合の二つの形式である」、「第三のもの、〈なんじ〉の中心的な現存、もっと正しくいうならば、現存の中に受け入れられる中心的な〈なんじ〉が、真の人間生活を創り出すのである。」(59)

「精神それ自体がけっして独立して生活に働きかけることはなく、〈それ〉の世界に浸透、これを変容させる力として、はじめてこの世に働きかけるからである。」(65)

「根源語〈われ—それ〉の〈われ〉は、個的存在としたあらわれ、〈経験と利用〉の〈主観〉として自己を意識する。根源語〈われ—なんじ〉の〈われ〉は、人格的存在としてあらわれ(依属する属格なしに)〈主体〉として自己を意識する。」(80)

「〈われ〉は現実への自己関与によって真の〈われ〉となる。」(81)

「二種類の間があるのではなく、人間性の二つの極があるのみである」、「この二重の〈われ〉」(83)

## 第三部：

「さまざまな関係を延長した線は、永遠の〈なんじ〉の中で交わる。それぞれの個々の〈なんじ〉は、永遠の〈なんじ〉へのかいま見の窓にすぎない」、「ただ絶対に〈それ〉にならない〈なんじ〉と直接関係にはいるときにおいてのみ、完全になる。」(92)

「神の名が讃美されるとき、それはたんに神について語るのではなく、神に向かって語っているからである。」(94)

「神との間においては、絶対的排他性と絶対的包括性とが一つになる。」(98)

「神は〈全き他者〉である」、「圧倒するような〈恐るべき神秘〉であるとともに、わたしの〈われ〉よりもはるかにわたしに近い自明の神秘である。」(99)

「この世界における個々の真の関係は、個別化による。この個別化は関係するものの喜びとなる。なぜならば、このような個別化だけが、相互の差異を認識できるようにするからである。」(125)

「人間と人間の関係は、本来、人間と神の関係の比喩である。」(130)

1. 根源語から人間存在へ、言葉・言語から存在へ

二つの対応語、二つの存在・世界  
 出会い、関係から自己へ、相互性  
 間、愛、責任、選び、恵み

2. 個と共同性、関係の中心

3. 〈それ〉の意味、両極性

波多野の言う文化的生、

4. 永遠の〈なんじ〉、神、神秘、すべての関係が交差するところ。

なぜ神が語られるのか。

↓

・特定の宗教的伝統に限定された思想ではなく、「哲学」として。

・水垣渉「《言葉》の始源」

基礎語 (Grundwort) : Ich-Du, Ich-Es

始源語 (Urwort) : Ich-wirkend-Du, Du-wirkend-Ich

〈なんじに働きかけつつあるわれ〉、〈われに働きかけつつあるなんじ〉

↓

出来事・生成／関係・創造

出会い 間・相互性

選び・愛

言葉・語り

## (2) ユダヤ思想家

5. ヘブライ的人文主義

・人文主義 (ヒューマニズム) の普遍性と「ヘブライ的」の特殊性との関係。

・「ブーバーによれば、かかる宗教性として把握された「ユダヤ教的なもの」の根源に復帰することは、現実の諸問題に背を向けるたんなる懐古趣味を意味するものではない。むしろ、こうした根源への復帰が、われわれの生活の具体的変革となって実現するのであり、さらにわれわれの生活の変革は「人格の生ならびに共同体の生」の変革のうちに表現されるのである。われわれはここに、ユダヤ主義への徹底を通して、普遍人間的地平を開こうとするブーバーの思想の独自性を垣間見ることができる。」(山本、1969、30-31)

・『ユダヤ人とそのユダヤ主義』(Der Jude und sein Judentum, 1963.)

ヘブライ的聖書 (古代の宗教的伝統) → 聖書的人間像の価値 → 時間的に制約されたものと超時間的なものとの区別 → 獲得された人間像のもつ現在のな生に対する規準。

・『我と汝』の対話の哲学のもつユダヤ的基盤 (?)

ハシディズム的背景: 「神の火花」

6. ドイツ語訳聖書: エクリチュール/パロール

ルター訳聖書に対して。ドイツ語を話すユダヤ人のために。

書き言葉としての聖書テキスト。

↓

音声、リズムへの注目。

- ・「イスラエルよ、聞け」（申命記）  
「この律法を口から離すことなく」（ヨシュア記 1:8）  
「信仰は聞くことにより、キリストの言葉を聞くことによって始まる」（Rom.10:17）

7. 信仰の二類型：ユダヤ教とキリスト教

エムーナ(民族的)とピステイス（パウロ、個人的）の区別

↓

ユダヤ教にとってのキリスト教の意義

**(3) 実践家ブーバー**

8. 教育者：ヘブライ的人文主義→民族教育、教養

ドイツ語訳聖書の意義

9. 社会実践家

- ・宗教社会主義：アナーキズム的→イスラエルの「キブツ」

中央集権的国家ではなく、協同組合のネットワークによる新しい社会の実験。

- ・シオニズム：文化的シオニズム、根源的にユダヤ人全体の精神的ルネサンスを地盤とする文化運動としてのシオニズム。

cf. ヘルツルの政治的シオニズム：政治的な意味におけるユダヤ人の国家再建

- ・アラブとユダヤの共存：一つの土地に生きる二つの民族（二民族国家論）

一つの土地を共に耕す、「ユダヤ人とアラブ人の共同経済」

cf. ユダヤ的伝統としての異民族への配慮、ルツ記

- ・レビ記

23:22 畑から穀物を刈り取るときは、その畑の隅まで刈り尽くしてはならない。収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない。貧しい者や寄留者のために残しておきなさい。わたしはあなたたちの神、主である。

**〈参考文献〉**

1. 平石善司・山本誠作編『ブーバーを学ぶ人のために』世界思想社、2004年。
2. 『ブーバー著作集』全10巻、みすず書房。
  - ・『孤独と愛』『対話の倫理』『孤独と対話』創文社。
  - ・『マルティン・ブーバー聖書著作集』全3巻、日本キリスト教団出版局。  
『モーセ』『神の王国』『油注がれた者』
  - ・『我と汝・対話』岩波文庫。
  - ・『ひとつの土地にふたつの民——ユダヤ-アラブ問題によせて』みすず書房。  
メンデス=フロール編、1918～1965年までの66のエッセイ・小論。
3. 山本誠作『マルティン・ブーバーの研究』理想社、1969年。
4. 平石善司『マルティン・ブーバー』創文社、1991年。
5. 稲村秀一『マルティン・ブーバー研究——教育論・共同体論・宗教論』溪水社、2004年。
6. *Martin Bubers Werke-III*, Lambert Schneider Verlag; Kösel Verlag, 1962/1963.  
*Werkausgabe*, 22 Bde. Güterslohr Verlagshaus, 2003-.
7. 京都ユダヤ思想学会：<https://sites.google.com/site/kyotojewish/>